

[資料紹介]

富山藩旧蔵書関係目録と『曾子孝実』について

**Old Book Catalogues of the Toyama Clan
and the “Sō-shi Kou-zitsu”**

磯 部 彰

[資料紹介]

富山藩旧蔵書関係目録と『曾子孝実』について Old Book Catalogues of the Toyama Clan and the “Sō-shi Kou-zitsu”

磯部 彰 (Akira ISOBE)*

キーワード：富山藩 前田家蔵書 広徳館蔵書目録闕本帳 御書籍目録 曾子孝実

はじめに

1. 富山藩旧蔵書の現存状況
2. 富山藩旧蔵書関係目録 2 種
3. 広徳館蔵版『曾子孝実』の出版

はじめに

江戸時代、越中富山藩は、売薬産業と深く係り、前田家主導による本草学が盛んであった。また、石黒信由らによる算学や地図製作などもあり、特異な文化体系を作り上げていた。他方で、室町幕府に仕えた蜷川氏が江戸幕府に大身の旗本（500石から5000石）として出仕し、本宗の菩提所が富山の最勝寺にあったため、前田家とは別のルートで江戸（幕府）と富山はつながりを持っていた（注1）。

日本の印刷・出版文化を考える時、中国や朝鮮から輸入された漢籍・朝鮮本は重要な働きをしたことは言を待たなくてもいい。その漢籍類を江戸期に大量に蒐集したのが、加賀に本家を置く前田家であった。従って、前田家の蔵書とその所蔵本の役割、地域文化に与えた影響を考えることは、江戸文化の一端を明らかにすることになる。前田家は、本宗の加賀前田家以外、富山と大聖寺に二支藩、上州七日市に一分家を擁した。今回は、富山前田家における漢籍蒐集の場合について、研究の途次ではあるが、出版文化資料の紹介を行なおうと考える（注2）。筆者も前田家の蔵書をめぐって、富山所在の漢籍について部分的に公表したことがある（注3）。

* 東北大学東北アジア研究センター

今回の資料紹介では、先学の研究成果を負いつつ、富山県の東アジア・環日本海文化交流の基盤となった富山藩の漢籍のゆくえ、藩の出版物について、原資料の複印を交え、調査した成果の一端を紹介したいと思う。

1. 富山版旧蔵書の現存状況

東アジア世界では、かつて、中国文化を基本と据えていたため、その文化を伝えるいわゆる漢籍、唐本は大切に扱われ、高価な品でありながらも、多数所有しようという姿勢が見られた。これは、もちろん富山でも同じことで、富山藩主前田家を中心になって収集していた。前田家といえば、宗藩である加賀前田家の尊経閣文庫が有名で、徳川将軍家と並ぶ多くの資料が残っている。富山藩は、大聖寺藩とともに加賀藩より分藩した支藩で、その石高は本家のわずか1/10であるが、城主格の身分であり、江戸時代の大家名ではそれほど小さな藩ではなかった。ところが、今日、富山藩が所蔵していたと思われる和書漢籍は、同じ支藩で七万石（のち10万石）の大聖寺藩のそれよりも相対的に劣る図書のみが残り、他家小藩での所蔵図書とさほど変わらない。これは後でも触れるように、富山藩初代前田利次以来の当初からの蒐集本が残ったわけではなく、天災・人災で失った後に補充された結果であったように見える。

富山藩では、安永2年（1773）、第6代藩主前田利与の治政のもとに藩の学校、広徳館を設立し、儒学者を教師として武士の子弟教育を始めた。後年編纂された『富山藩学制沿革』（金沢市立図書館蔵加越能文庫蔵）では、富山藩は当初より数百種の蔵書を所蔵していたが、明治元年、広徳館の火災ですべてを失ったと言う。実際、『広徳館蔵書目録闕本帳』という、欠冊もしくは紛失した書籍を列挙した目録があることから、広徳館に備え付けてあった書物は、「広徳館蔵書目録」というような図書目録のもと、十万石にふさわしい蔵書があったのであろう。

さて、現在、富山藩関係旧蔵書を主に所有する機関は2ヶ所知られている。

①富山大学附属図書館本

廃藩置県によって富山藩が解消したため、廃学された富山藩学校を継承して新たに設けられた教育機関、新川県講習所を経て、新川県師範学校、石川県富山師範学校、富山県師範学校などを経て、今日富山大学に到る過程で保存された図書。

②富山県立図書館本

明治42年、旧富山県立図書館が開設された。同年12月に旧富山藩主である前田利同が蔵書を寄贈しているが、おそらく旧市立図書館設立に呼応した行為であろう。旧富山県立図書館は後に昭和15年に開館した県立図書館と合併された。その後、旧市立図書館時代の蔵書印の廃棄・変更が行なわれた。県立図書館に所蔵される藩関係の図書では、前田邦寧蔵本と前田利同寄贈本がある。

この他、富山学校と改名された藩校が明治5年に廃止された折、明治政府に上納した本、

或は、廃棄処分となった本が若干あり、流転の末、いくつかの場所に収まった。例えば、

③国会図書館本（新川県提出本）

廃藩後、新川県と改称した富山藩が文部省に供出した書籍類で、『本草通串』や洋書が含まれる。

④富山市郷土博物館本など

今日、富山市立図書館は旧市立図書館を承けた県立図書館とは別に存在するが、旧富山藩蔵書の収集は、市立郷土博物館が実施している。なお、現市立図書館には、和漢書を含む個人の蔵書コレクションがあるが、ここで取り上げる富山藩関係本とは関係が薄い。

『四書章句集註』に到っては、いつのまにか日本を離れ、スウェーデンの王立図書館に収納された（注4）。

2. 富山藩旧蔵書関係の目録2種

富山藩が初代の利次以降、どのような蔵書を持ち、いかなる知識層が形成されていったのかは、肝心の蔵書も完全に残らず、正式な蔵書目録も存在しないため、明確にその全貌はつかみがたい。そのために、まず、今日富山藩旧蔵書と見られる書籍の全調査が求められる。筆者は、富山県立図書館及び富山大学附属図書館、国立国会図書館の3ヶ所の調査とデータ蒐集を実施し、その分類目録を作成する緒に着いた。一方、関連機関の協力を得て、広徳館蔵書時代に遡り得る2種の蔵書目録を手にすることが出来た。一本は、『御書籍目録』であり、いま一本は、上述した『広徳館蔵書目録闕本帳』である。

『御書籍目録』（富山市郷土博物館蔵）には、表紙に「明治十五年十月 前田家御用辨方」とある一方、本文中に「西洋林那斯（壺）冊」の注記に「利保公譚」とあることから、富山前田家の執事によって作成された旧藩主家の家蔵目録と見なすことが出来る。書籍目録には、各書頭に「貸」朱印が捺されるほか、「二十年五月東京へ回送」などの朱記が書名上欄に記されるものがあり、また、「有用」という墨書付箋が貼られるものがある。おそらく、廃藩後、富山前田家個人としての蔵書（財産）を整理した目録であろうが、一部を除いて、当時、他所へ貸与していたのであろう。貸与先が明治八・九年の文部省への提出、もしくは師範学校など定かではないが、明治二十年になってその一部を取り戻し、東京の前田邸へ送り届けたと思われる。もともと貸出さなかった一部の書は、

一蘭語国字類聚 壺冊

一亜米利加総記 壺冊

一地学正宗 七冊

但シ地図貳帖添フ

- 一野史纂略 七冊
一萬国海路之記 五冊 …

など、洋学関連書であった。これは、廃藩後に前田利同が洋行した体験と関連があるろう。

ところで、明治42年、旧富山市立図書館が開設された折、前田利同は蔵書を寄贈した。その折の寄贈書と『御書籍目録』記載書名を比較すると、同一書もしくは同一書名のものを見出すことが出来るが、それは少数で、大半は一致しない。寄贈本には、「敬斎」「前田熊印」などの印、もしくは「菅声持」などの朱筆があるものが中心なので、この時の寄贈書は、利同の前の藩主であった前田利声の旧蔵書が中心であったと思われる。

当時、隠居して久しかった利声が、戸主である利同を通して寄贈したと思われる。従って『御書籍目録』記載の書は、前田利保蔵書から藩学校へ移された萬香文庫系のものや前田利声所蔵のものとは別のもので、一部は富山藩前田家伝来の書籍に加えて、利同が金沢から養嗣子として入城した折、持参した書籍に廃藩後自ら蒐書したものを加えた目録とも思えるのである。

一方、『広徳館蔵書目録闕本帳』（富山市郷土博物館蔵）は、その書名が物語るように、藩校の広徳館蔵書のうち、欠冊となった不完全本のリストである。換言すれば、闕本帳があるということは、この帳簿に対する全体の書籍目録である「広徳館蔵書目録」が、この帳簿が写される時まで存在していたことを示すものである。闕本目録は、「経書部」「史部」「集部」「雑部」「和書部」と分類されることから、広徳館蔵書の漢籍はほぼ四部分類形式をとり、和書は別立てになっていたことがわかる。しかも、書籍は、唐本・和刻・写本の区別がされていた。同時に、冊数も記されていたことが、「全部闕本之類」の記述からわかる。例えば、「爾雅 全部闕四本 唐」とあるように、当時存在しない本の書誌や状況は、当然、それまで存在していた時に記された蔵書目録に拠らざるを得ないからである。

闕本目録を見る限り、唐本の「十三経注疏」や「二十二史」、「資治通鑑」・「淵鑑類函」などの大部の書、或は、「類聚国史」写本などが、かつてはある時期まであったことがわかる。富山藩が成立し、藩校がその役割を果たしつつあった江戸後期ごろまで、富山藩校蔵書は比較的豊かであったことを想像させる。

闕本目録には、「敬斎所蔵」印が捺されていて、かつて富山藩主、もしくはそれに近い人の蔵書であったことがわかる。もしもこの目録が敬斎なる人のための副本でなければ、広徳館蔵書の闕本台帳的な性格を見て取れることから、広徳館そのものには蔵書印がなかったとも推測される（注5）。

さて、次に富山藩で収集された中国の書物をもとに、藩独自の出版物を刊行したことに視点を移してみよう。

3. 広徳館蔵版『曾子孝実』の出版

富山藩校であった広徳館で刊行された書籍は幾種あり、四書五経が有名であるが、同じ儒教関連の書で『曾子孝実』一冊は享和癸亥（3年、1803）刊で、薄冊ながら最も古い出版物で、記念的存在である。本書は、過去に笠井助治氏が紹介されたことがある（注6）。

現在、『曾子孝実』は、富山大学に一本がある他、町田市の無窮会図書館の織田文庫、佐賀県の多久聖廟がある多久市の廟山文庫にそれぞれ一本がある。

以下、富山大学本『曾子孝実』によって論を進めたい。

一般に、今日残る漢籍の所蔵状況からは、『曾子孝実』の単刊本は見られず、それは『孝経大全』に含まれるに過ぎない。広徳館が刊行した『曾子孝実』は、その印刻の様子から、依拠した版本があると察せられる。当然、『孝経大全』に拠るとも見られるが、『孝経大全』には幾種かの版本がある。

富山前田家にとっては宗家である金沢の加賀前田家の尊経閣文庫には、明刊『孝経大全』があり、『曾子孝実』も含まれる。尊経閣文庫本は書名は同じであるが、「費活然校」本で萬曆乙酉13年（1585）序刊本である。広徳館版曾子孝実と比較すると、本文の行字数はまったく異なるが、広徳館版がその萬曆刊本の覆刻でなければ書誌的体裁の相違は容易にあり得ることで、さしたる問題ではない。しかし、本文中の割注部分で、双方を対比すると、尊経閣文庫本は広徳館本より注の文章が多い傾向にある。また注意すべきは、広徳館本第十五葉b面で、本文に

曾子敝衣、力耕泰山下。人雨雪凍甚。……

とし、人字を□囲み（引用二重下線部）、眉上に注記として、

人字恐衍

と注刻を添える。これに対し、尊経閣文庫本は人字を「天」とする。従って、富山藩本の依拠したテキストは、加賀前田家の明刊本『孝経大全』ではないことが判明する。

その萬曆本に遅れて、東大東洋文化研究所・東北大学には崇禎六年序刊本の『孝経大全』があり、午集に『曾子孝実』が収められる。この崇禎本は「江元祚刪註」とし、広徳館版と一致する。

さて、本文を対比すると、封面を除けば第一葉以下、行字数も本文もまったく両者は一致し、広徳館本の底本が崇禎本であることが判明する。ところが、崇禎本第五葉から両者の行数、と言うよりは、崇禎本の最後の一行が広徳館本では次の葉の最初の一行となっはみ出していく

ようになって行く。そして、最後の第十七葉a面まで全く同じ様相を呈す。これは、実は崇禎本に問題があり、第五葉の最初からの割注で、

……不告而娶其類也。

とある「不告」の二字を、崇禎本は一字分の行字数に収めたことによる。広徳館本は、崇禎本の2字を1字分に収めていたのをわざわざ二字分として扱い、最後の「也」を次行に渡定したため、ついに、一行づつずれることになったのである。萬曆本で認めた第十五葉の問題の字も

曾子敝衣、力耕泰山下。人雨雪凍甚。……

と、両者は「人」字として一致する。実は、崇禎刊『孝経大全』には和刻本もあり、富山広徳館蔵版の『曾子孝実』は訓点をふくめて、明刊本ではなくその和刻本に拠った可能性も考えられる。ところが、和刻本は富山藩本に比べて第五葉b面から、1行分ズレが出て来ている。しかも十五葉b面の返り点が異なり、「人」字をまちがえと見た広徳館本に対し、和刻本孝経大全は「人」を無理をして次のように訓読している。

力耕泰山、下_レレ(返り点-筆者注) 人_ニ。

従って、訓読が異なることから、広徳館本は和刻本に拠ったものではないと言える。このことからみて、おそらく、かつて広徳館蔵書にあったであろう崇禎本『孝経大全』から、比較的短い『曾子孝実』を抜き出して翻刻し、訓点を施したものが、現在の広徳館刊本で、封面など、若干添付して単行本としたのであろう。『曾子孝実』は伝存本が少ないため、今回、富山大学より許可を頂いて、全葉を影印しその依拠した崇禎刊『孝経大全』と対比できるようにした。

以上、富山藩旧蔵本が富山県内とともに国会図書館に多く残っていること、広徳館で出版した『曾子孝実』は、明の坊刻本と思われる崇禎本に拠ったが、その文字をうのみにして覆刻せず、文献批判を加えて訓読していて、この点、和刻本孝経大全が原本の文字を頭から信じて訓点を施した姿勢とは異なることを紹介した。後日、富山藩旧蔵本データを整理して藩学の性格を分析して、その地域文化の特色を明らかにすることを予定し、その前座として、中途ながら地域研究の一例として報告した。

(付記) 資料掲載及び利用に当たって、富山大学附属図書館並びに富山市郷土博物館、富山県

立図書館から格別の配慮を頂いた。また、兼子心氏には、『御書籍目録』等の教示と写真を頂いた。各位にお礼を申し上げる。

注

- (1) 坂井誠一氏『遍歴の武家』、吉川弘文館、1963
- (2) 越中国（富山県）における歴代の出版や印刷物、或は、藩校蔵書などについては、古くは、笠井助治氏の『近世藩校に於ける出版書の研究』（吉川弘文館、1962）、村上清造氏「越中における印刷・出版の研究」（1959）、西村正守・佐野力両氏「東京書籍館における旧藩蔵書の収集」（『図書館研究シリーズ』No.15、1973）、近年では、綿拔豊昭氏『和漢書覚之書』（桂書房、1992）がある。
- (3) 磯部 彰「富山県に残存する漢籍・古鈔本」（『富山の自然と文化』、1991年8月、P359-366）、同「近世における越中国の漢学」（『富山大学人文学部紀要』18号、1992年3月、P280-302）、同「越中国学所蔵宝巻・宝典について」（『富山大学人文学部紀要』23号、1995年8月、P209-232）
- (4) J.S.Edgren: "CATALOGUE OF THE NORDENSKIÖLD COLLECTION OF JAPANESE BOOKS IN THE ROYAL LIBRARY", 1980
- (5) 富山藩関係旧蔵書に捺される蔵書印をめぐる検討は、別稿にまわしたい。
- (6) 笠井氏（注2）参照

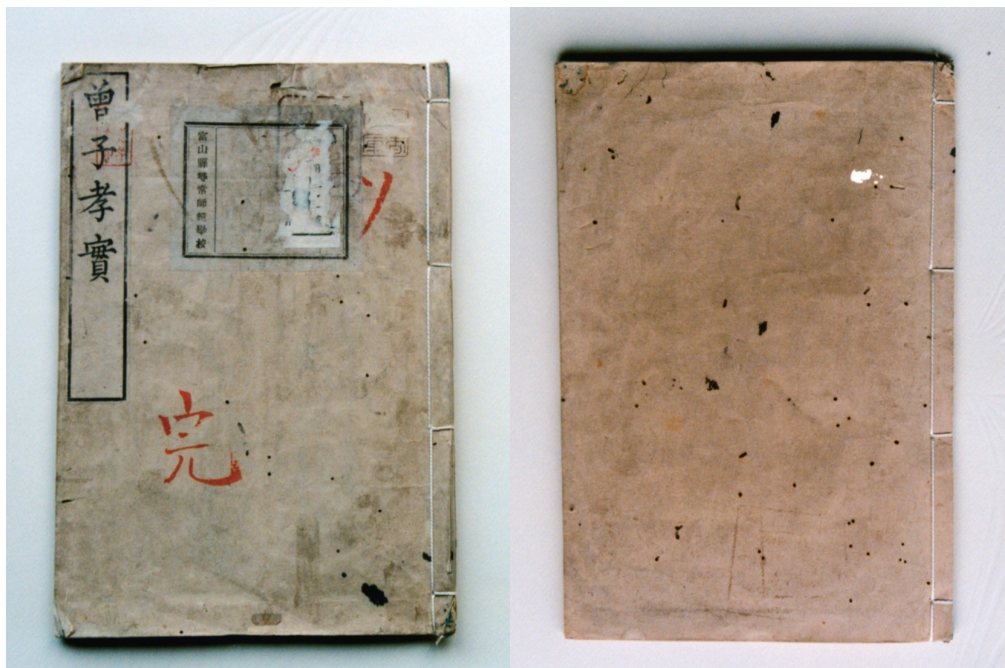
附録図版

『曾子孝実』（富山大学附属図書館所蔵）

全長 縦26.5cm×横17.7cm

匡郭内 18.7cm×12.5cm

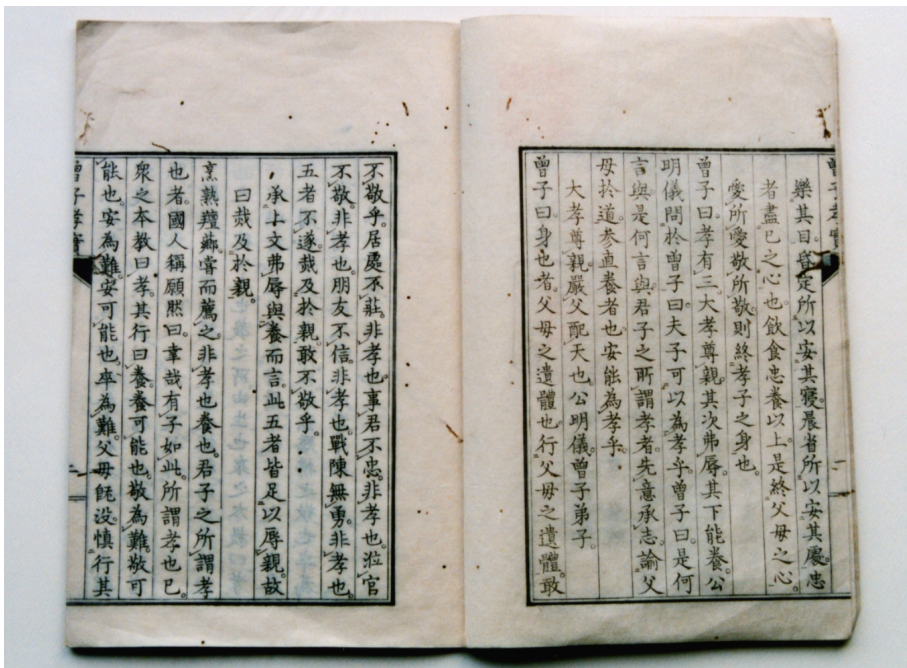
『曾子孝実』表表紙・裏表紙



封面

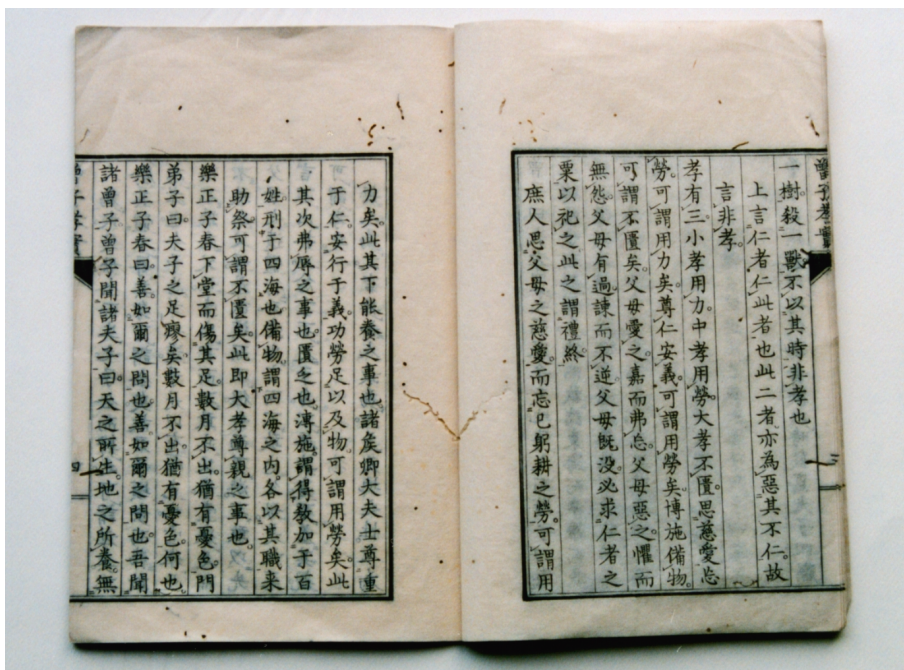
図1-1

(1) 『曾子孝実』第1葉



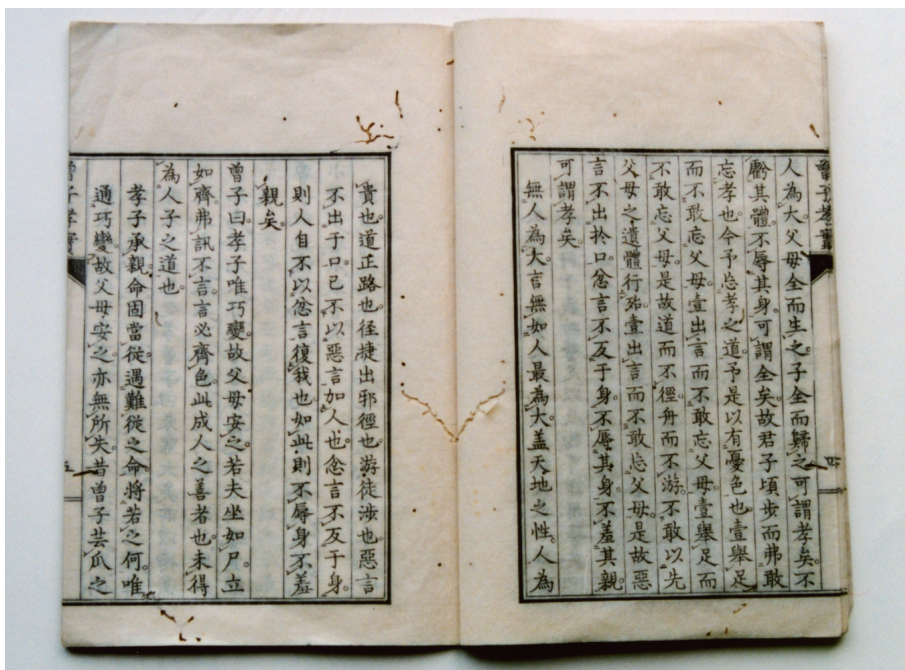
(2)

(3)



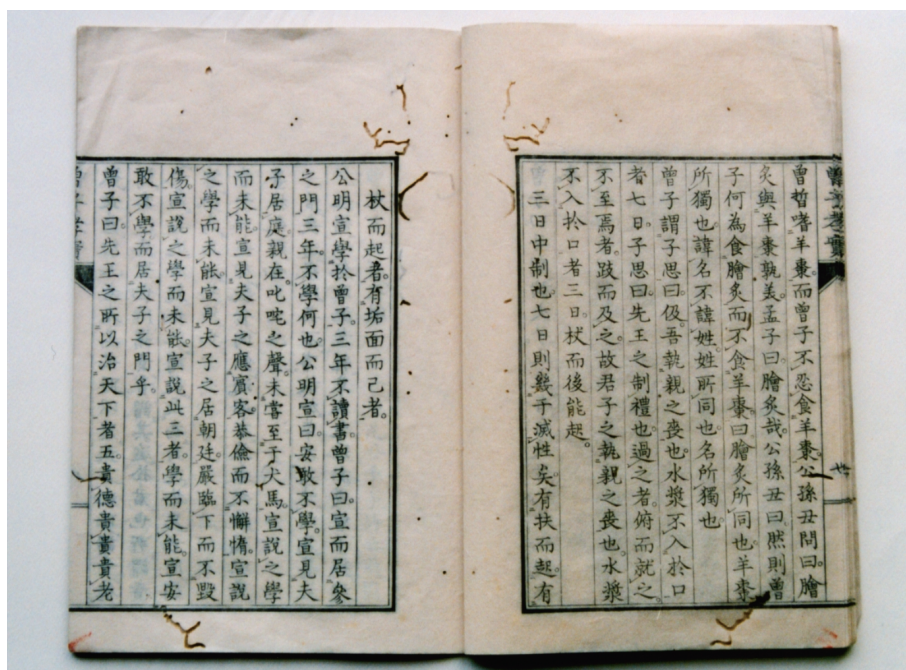
(4)

(5)



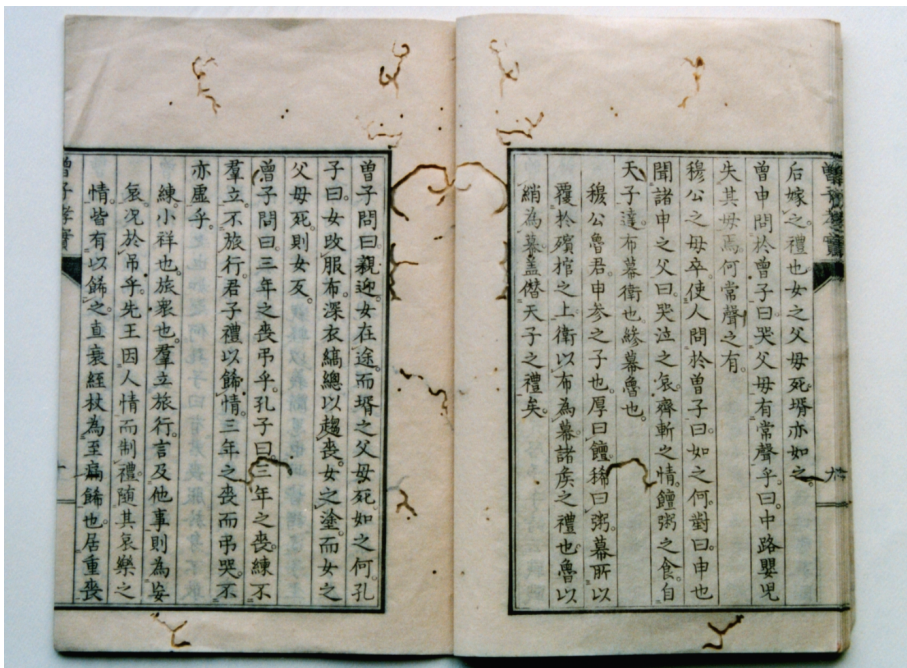
(6)

(7)



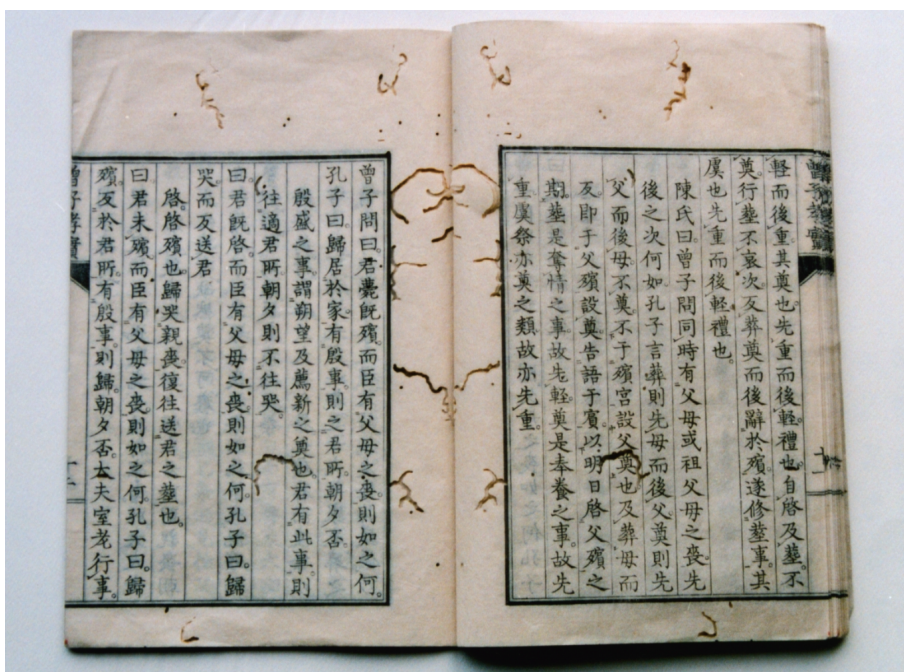
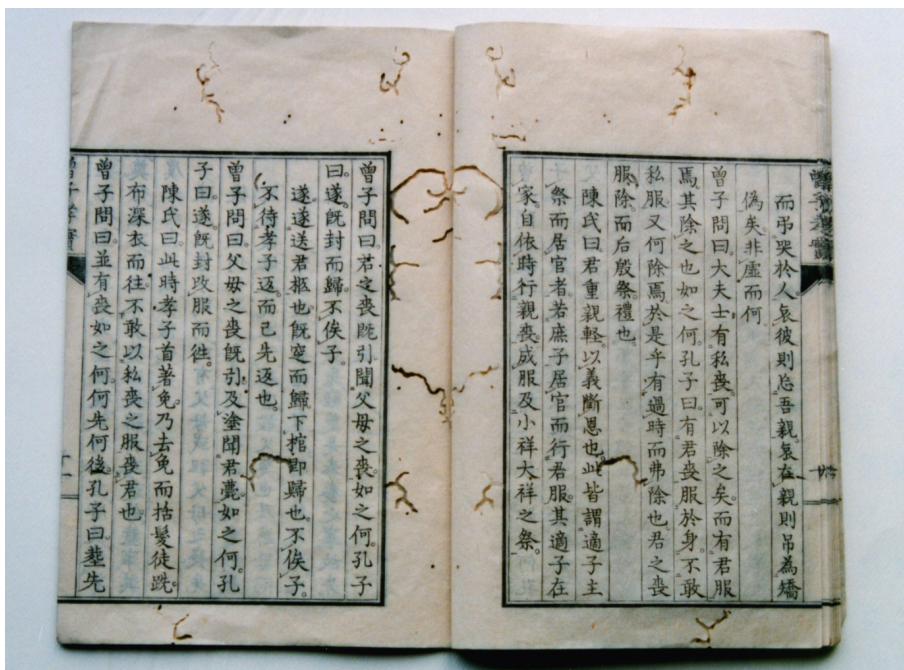
(8)

(9)



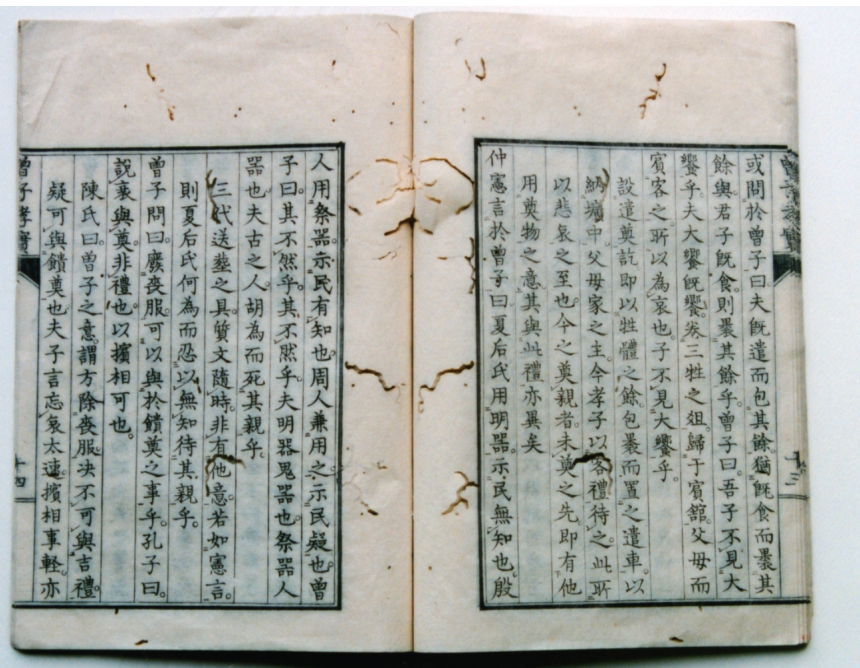
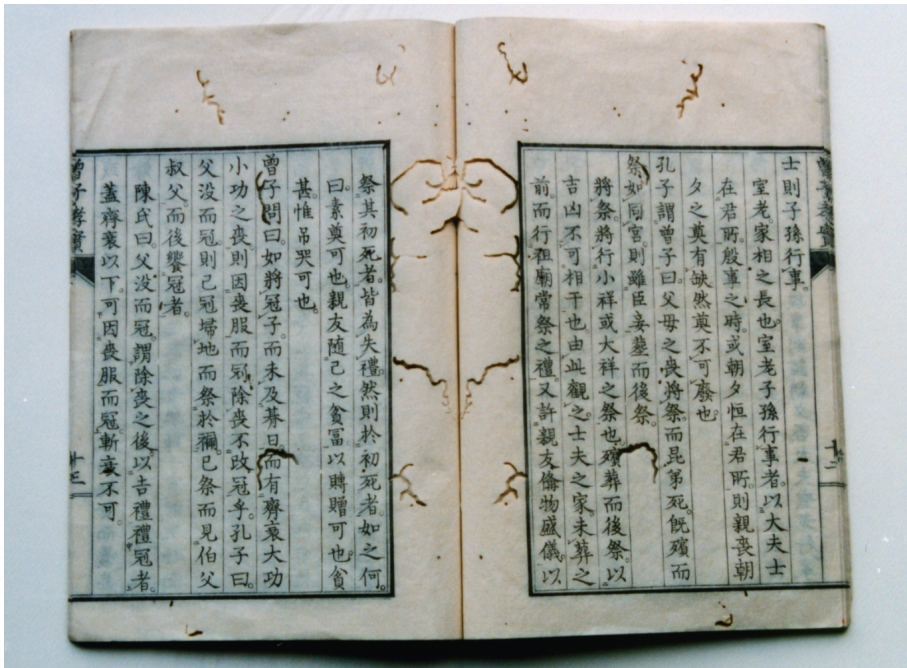
(10)

(11)



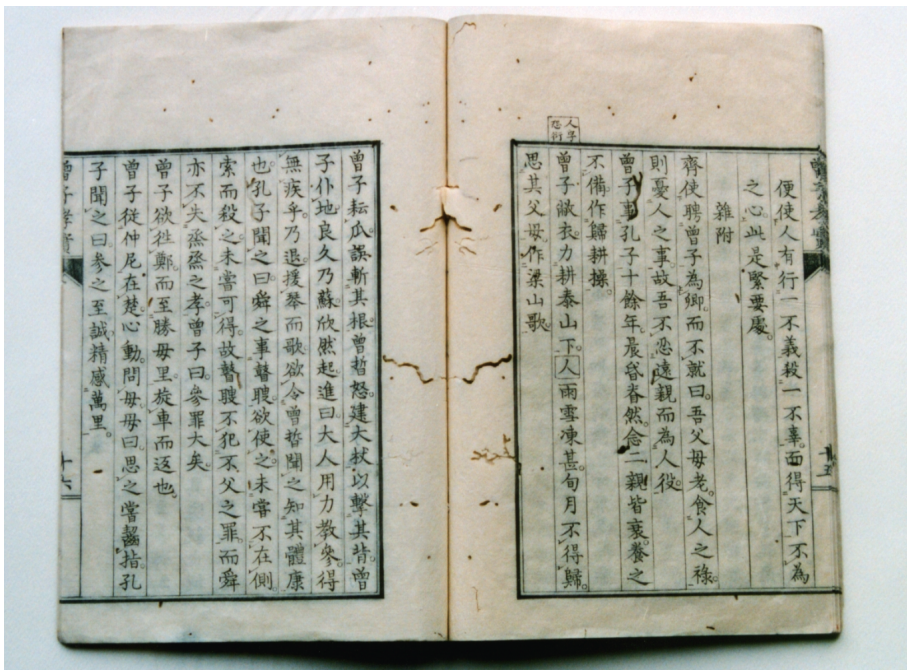
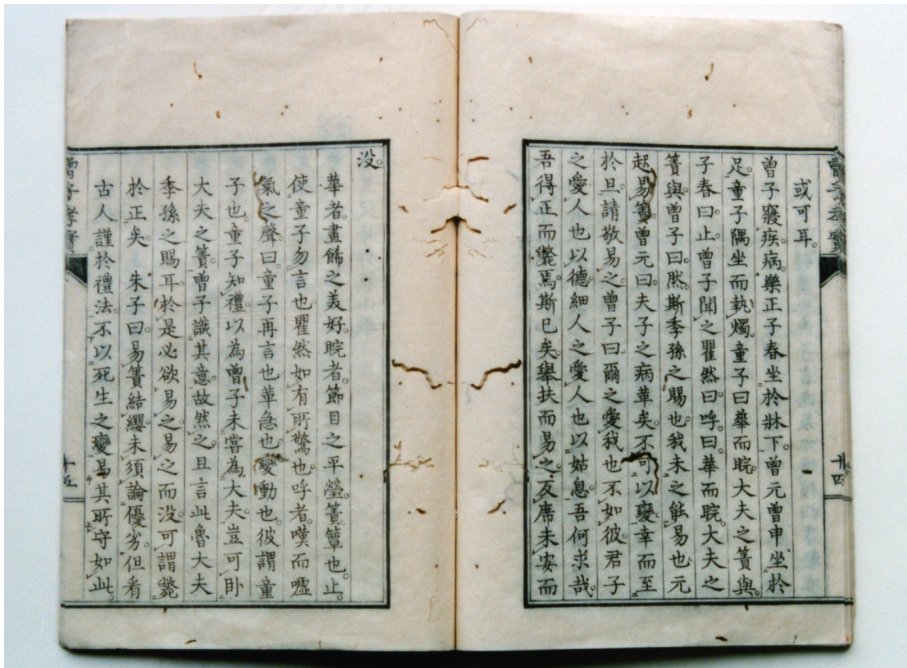
(12)

(13)



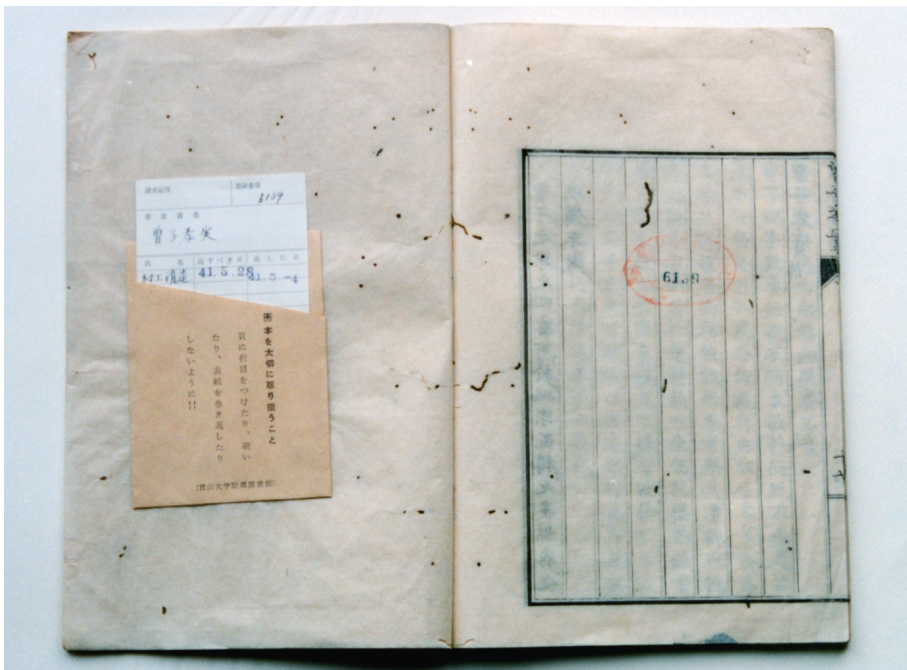
(14)

(15)



(16)

(17)



第17葉 b 面・裏表紙(裏)